

アメリカの中等学校におけるエンパワーメント教育 ： ヒップホップを使った自己表現活動

川上, 具美
九州大学大学院人間環境府教育システム専攻 : 博士課程3年

<https://doi.org/10.15017/7374754>

出版情報 : 国際教育文化研究. 7, pp.61-72, 2007-06-30. Comparative and International Education,
Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



アメリカの中等学校におけるエンパワーメント教育

——ヒップホップを使った自己表現活動——

川上 具美

はじめに

本稿は、アメリカにおけるマイノリティの生徒に対するエンパワーメント教育として行われているヒップホップを使った実践について、その意義をその音楽の持つ文化やその活動から生まれる意味を分析するものである。

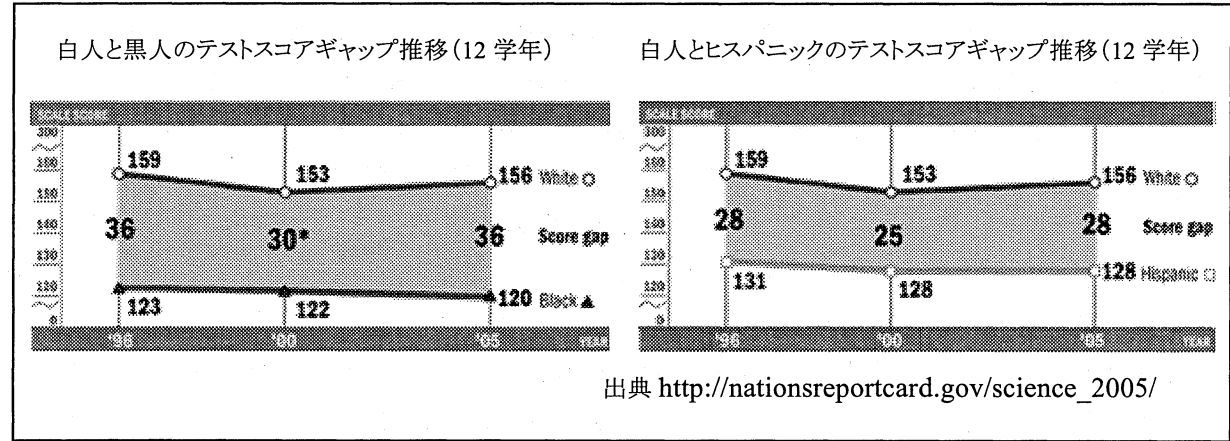
現在ニューヨーク州では、州主導下で実施される標準テストの影響から進級できずにドロップアウトする生徒が増えている。特に、アフリカ系アメリカ人やヒスパニック系アメリカ人に多く、こうした生徒に対して各学校では様々な手段から彼らを学校に戻すことを考えている。ここでは、特にポップカルチャーとしての「ヒップホップ」音楽に着目し、その詞と音楽やリズムのもつ意味が、彼らにとってマジョリティ文化や学校文化からの抑圧に抵抗する対抗文化の象徴となっていること、また若者の間での流行からヒップホップ通じて、そうしたマイノリティの生徒に発言の場、承認の場を与えていることを考察する。

ヒップホップを使った授業の主たる活動は、作詞にあり、リテラシー教育の一つとして認識されている。そうした文章作成といった創作活動については、日本においても綴方教育として取り組まれてきた経緯がある。例えば、戦後の貧困や教育への不信感をもつ子どもたちに対して行われた「山びこ学校」や、九州の旧産炭地筑豊において閉山や落盤事故によって意欲や希望を失っていく子どもたちにたいして行われた作詩活動¹などで見る事ができる。日本の綴方教育と、今回取り上げるアメリカにおけるヒップホップを使った教育との間にある違いは、ヒップホップの持つ音楽やリズムという要素、そして大衆に受け入れられ対抗文化として役割が認識されているところにある。つまり、ヒップホップの持つ対抗文化的な文脈が、これを創作する側の生徒にマジョリティ文化や学校文化からの文化的「承認」を要求する手段を与えているのである。本稿では、そうした文化的な背景を、「ヒップホップ」のリズムや音楽に含まれるアフリカ系アメリカ人伝統、そしてその進化の中で様々な対抗的な文化を持つ人々の心を捉え、そうした人々のセルフアサーション（自己肯定感）を高揚させる手段となっていることを述べる。

1. 学校と生活間の文化ギャップと、エスニックグループ間の学力格差

学校文化が中産階級や上流階級の文化を再生産する場であり、労働者階級に対する階級の卓越化が行われていることは、ブルデュー（Bourdieu）を初めとする社会学の論者によって論じられてきた²。1960年代から始まった学校文化への懐疑的な視点は、学校からの脱却を唱えるイリイチやフレイレなどによって明示され、学校では幾度となく民族教育や多文化教育などといった多様な視点をもった教育が指向されてきた。しかし、1980年代の日本の経済的躍進は知識重視の日本型教育への見直しへとつながり、アメリカやイギリスではそれまでの多文化的な教育や進歩主義的な教育が批判され、グローバリゼーションの進展と共に、基礎学力としての読み書き・計算能力育成重視へと変化してきた。アメリカやイギリスでも、日本の学習指導要領のような統一したカリキュラムが作られることになり、テストなどによる評価も積極的に行われている。

しかしそうした評価（NAEP など）の厳格な施行は、特定のエスニックグループのスコアの低迷³や高いドロップアウト率⁴というあらたな問題を生み出している。カリキュラムにおける伝統的な知識への傾倒は、言い換えると個々の生徒のもつ様々な生活文化を包含するような、多文化性をもったカリキュラムの否定を意味している。



アフリカ系アメリカ人の生徒の生活文化と学校文化のギャップについて、ヒース（Heath）やシューマン（Shuman）は、アフリカ系アメリカ人の生活世界の知識と学校において称揚される知識の間にリンクがなく、彼らはそのコミュニケーションの方法や感覚において評価されるチャンネルが不足していると述べる⁵。

一方で、アフリカ系アメリカ人だけでなく、イギリスにおける労働者階級の文化や社会的態度の形成を分析したウィリス（Willis）もその著書のなかで教育の基本的なパラダイムは、進歩主義や生活関連主義の教育思想を取り入れたとしても変わることはなく、学校の外に起源を持つ私的領域から生徒が異化していくことで、それは正当性を失うと述べている。また、黒人少年の存在についても、その動きを「超反学校（hyper “lads”）」という文化で示し、イギリス労働者階級の文化とも異なるその起源が西インド諸島の賃労働とは無縁の生活システムにあり、学校文化・社会文化とも折り合いの難しい複雑な状況を生んでいると触れている⁶。

こうした学校における知識と生活における知識のギャップを埋めることは、学校教育の場に

において、アフリカ系アメリカ人の生徒が生活の中で養ってきた能力や文化的な枠組みを表現する場を与えそれを評価する活動を取り入れることでもあり、一方では学校という場で価値づけられている知識の文脈を変化させる意味もある。その手段として、生活と学校の不連続性を和らげるヒップホップという若者文化の視点をもったライティングを識字教育に取り入れる有効性が指摘されているのである⁷。その活動の中心は、学校に先立って、地域コミュニティの識字率を上げるためにアフリカ系アメリカ人が行く教会やレストランなどで自発的に、また組織だっで行われることが多い⁸。

2. ヒップホップを使ったリテラシー教育

(1) 現象としてのヒップホップとその起源

アフリカ系アメリカ人が造りだしてきた音楽的な表現は、奴隷としての厳しい日々の経験の中で生まれてきた。多くのアフリカ起源を思わせるリズムやビートは、ジャズやラップのリズムを創りだし、これがコミュニケーションや自己表現の一手段となってきた。ギルロイ (Gilroy) は、「奴隷の読み書き能力へのアクセスはしばしば死刑に処されるほどまでに否定されており、プランテーションや奴隷収容所の生活では否定されていた個人の自立性を表現する音楽以外の形式の代替物となるような文化的な機会はほんのわずかしき与えられていなかった」と黒人の置かれてきた環境に歴史的に考察し、様々なディアスポラの音楽がそうであったように、口語が主体となり身体との間に独特の関係性を持っていることを示唆している⁹。また、フリス (Simon Frith) は、「社会集団は文化的な活動をとおして、美的判断をとおしてはじめて、グループとして自己を知ることになる」とし、アフリカ音楽についてジャン・ミラー・チャーノフの言葉を引用しながら「人々の集団が自分たちをその共同体の関係性の中に組織づけ、組み込んでいることを明らかにする文化的な活動である¹⁰」と述べている。つまり、音楽というコミュニケーションツールを使って、黒人たちはその共同体の一員としてのアイデンティティを形成することになったというのである。

また、フリスは都市生活者などが見せるポストモダニズムの価値観においては、ヨーロッパの古典音楽といった上級文化と、ポップ音楽のような下級文化といった区別、また絵画や文学といったファインアーツと音楽やダンス、演劇と言ったパフォーミングアーツとの間の優劣といったものも意味を失い、ただ上級もしくは優れたものとされてきた前者のような芸術は「価値がひとつの対象、一つのテキストのなかに具現化され・・・(略)・・・『客観的』な読みが可能」なのに対して、後者のような芸術は「価値はなにか瞬間的なものとして体験され、分析はプロセスに重きを置」くために「『主観的』な読みが必要」になるという¹¹。つまり、フリスは後者の芸術について、オーディエンスの側がパフォーマーと主観的に関わり、パフォーマーは時間的な空間の中でストーリーを語り、聞き手に対して対話や応答を要求する相互作用的な関係が発生していることを示唆している。

事実、ラップやヒップホップ¹²が見せるリズムや語りには、相互作用的な関係を見ることは可能である。実際に音楽が示す文化性よりも、どんなことが語られ、どんな人々に受け入れられているのかを見ることでこの関係性は容易に想像ができる。

ギルロイによると、ヒップホップはジャマイカの音楽やその創作形態などが起源となって1970年代にニューヨークのブロンクスに移入され、サウスブロンクスの様々な社会関係によって発展しハイブリッドな音楽として作り上げられたものとされる。その後、ヒップホップ音楽はその音楽のもつ文化的な背景や形態（DJによるターンテーブル、ブレイクダンスやグラフィティなど）から、アメリカの都市に住む黒人貧困層における主要な表現メディアとしてだけではなく、今日世界中の若者のあいだに浸透し、大きなムーブメントを作りだすものとなった¹³。2006年に起こったフランスにおける移民暴動においては、暴動とラップの関係について報じたメディアもあり、なかには暴動の原因としてラップにあるとするメディアもあった¹⁴。記事の多くは、ラップが若者の心や考えを表現するものであり、社会や警察から受ける抑圧に対して怒りを叫ぶ手段となっていることを書いている。実際に、社会的な抑圧に対抗しようとする直接的な表現だけでなく、ヒップホップには女性蔑視の男性性的表現が多く見られるが、その強さというセクシュアリティは、「力を奪われ従属させられている人々の困窮を自覚的に救い出す¹⁵」という男性性のうえに成り立っているともいえる。

また、若者の間でのヒップホップの流行について、フィッシャー（Fisher）はその研究の中で、ヒップホップの起源は西アフリカで口頭伝承による歴史を語るグリオの伝統にあり、現在そのソウルやラップが若者にとって、「心の中にある様々なことを議論するための自由な表現の場」であり、彼らはダンスやラップ音楽など文化や好みを通して表現できるものであること、そしてヒップホップがアメリカの都市における黒人の経験を世界の人々に伝えるものであり、またその音楽そのものが歴史史料であり、年代記であると述べている¹⁶。

ここで、ヒップホップについて次のように定義づけることができるだろう。ポストモダニズムの価値をもつ社会や共同体において、その音楽によって体現するコミュニティの一員としての意識をもつことができ、また受け手の側が主観的に送り手の語るストーリー（言葉とは限らない）のなかで応答することで双方向のコミュニケーションを前提としていること。また、それに加えて、ヒップホップはその起源や発展した経緯にアフリカ系アメリカ人のディアスポラという背景を抱えることによって、対抗文化としての表現メディアとなりやすいといえる。

（2）描かれる世界——アフリカ系アメリカ人の生活世界

詩を書くとなると、まず何を書くだろうか。マヒリとサブロ（Mahiri & Sablo）は、マイノリティの生活にある知識の文脈を探るために、校外において書かれた生徒の詩を分析している。校外におけるライティング活動に焦点を当てた理由として、学校で書くように求められることと、生徒が書きたいことや好きなことが異なっていること、また生徒の中には書くことが嫌いでないにしても、教師に書いたものを見せる気がしないこと、という教師の回想を記している¹⁷。

マヒリとサブロが2人の生徒が学校外で自発的に書いた詩を分析している。そのうち、15歳の女子生徒は「愛、社会、私を取り巻くもの」についてたくさんの詩を日頃から書いているという。そのトピックやテーマには都市部低所得者層のアフリカ系アメリカ人として日々直面するつらい現実や苦しみを連ねたものが多く、紹介された4つの詩も銃によって殺される若者の

いる社会の苦しみを描いたもの、愛する人との出会いから世界が変わったことを伝えようとするが全ては夢であるというもの、暗い夜に女性が苦しみ雨（black rain）の中を間違った方向へと迷ってしまうがいつしか太陽がでて Black reign の Black Queen であることを悟るもの、兄弟が銃で撃たれ社会的チャンスのないゲットーの中で犯罪社会から脱することのできない苦しみを描いたものである。マヒリとサブロは、この詩に込められた意味を、隠喩を使って苦しい状況を伝えようとするものであり、混沌とした状況とコントロールしようとする欲望とのほざまにある気持ちを表していると解釈している。

もう紹介されたもう一人の詩は、将来ラップ歌手をめざす 17 歳のアフリカ系アメリカ人の男子生徒にとって作られた詩である。ここで、彼の無数に書かれた詩やまたそれを次々に披露する姿にマヒリとサブロも、リテラシー能力が都市部に暮らすアフリカ系アメリカ人の日々の生活においていかに使われているかに驚いている。取り上げられた詩は、たとえドラッグを売りホームレスという貧困から来る状況、差別や憎しみ、自分の複雑な家庭の状況と家族への愛情、白人少年のもたらす危害から家族を守ること、それでも愛を失ってはいないことを綴っている。貧困地域の現実と、例えドラッグを売ろうとも生きていくためという現実があること、そして貧困は奴隷制度の一種であるとも記している。

こうしたライティングの意義について、マヒリとサブロは、その研究の中で、話し言葉による詩の創作が、これまで伝統的に沈黙をせまられ無視されてきた人々に対してその生活や経験を表現する機会を与えるものであり、またこうした活動がコミュニティにある貧困や暴力を撃退させるものであることを示している¹⁸。学校の活動の中では、ドラッグ、人種差別、貧困、中絶などのトピックやテーマは過激すぎるものとして不向きとされ、教師に受け入れがたいものとして捉えられる。しかし、マヒリとサブロはこうした現実を直視し対処するための組織や統制力を身につけるためにも批判的な能力を身につける教授法の確立を主張している。

（3）実践事例：W 高校における Power Writing

マヒリとサブロの主張に呼応するかのように、現在、ポップカルチャーを使ったプロジェクト Power Writing がニューヨーク市公立学校 U 校¹⁹で行われはじめている。黒人生徒の学習への意欲を向上させ、動機付けをはかるために 2003 年からはじめられているプロジェクトである。このプロジェクトは、主に文学（Literature）の授業のなかで行われており、生徒は思い思いに自分の置かれている状況や思いを詩に綴り、ラップ調のリズムをつけ発表をおこなう。文学の教科を担当する教員全体で取り組んでいるこの活動は、最後には一冊の本として刊行される。さらに、数年の活動のなかでヒップホップを使った授業は、ビデオ化、ラジオやテレビ出演などによって新しい情報発信の場として拡大している。

生徒の詩には、社会に対する思いや偏見のまなざしに対する決意などが現実や日常についてリアルに書かれたものが多く、そこに参加する生徒は多くは黒人だけでなく、ヒスパニック系の生徒も参加し、彼らにとっても自己表現の場となっている。発信型のプロジェクトとして、また自分たちの文化としてのヒップホップを用いることによって文化発信型の社会参加促進教育のあり方がみえてくる。

U校は、前述したが貧困地区、犯罪発生率も高い地区に位置している。生徒の内訳は、2004年の統計で白人が1.7%、黒人が33.7%、ヒスパニック系が62.7%、アジア系その他が1.9%である。生徒の家庭の経済状況を示すフリーランチの受給率は約90%である。アメリカに来て間もない移民の生徒は全体の3%にすぎず、生徒の大半はこの地区で生まれ育ったマイノリティといえる。ニューヨーク州の標準テスト(Regents Examination)の合格率は平均して受験する生徒の20%程度である。全生徒の留年し年齢オーバーの生徒も25.6%いる一方で、出席率は82-83%あり、卒業率も67.9%とW校と比べても高い。

貧困地区であるにもかかわらず、留年してでも高校卒業資格を得て大学進学を目指す生徒が二年大学、4年大学併せて85%にのぼっている。学校内で生徒にインタビューしたときも、資格を得るために大学進学を目指していることを話す生徒や、卒業資格を得るために学校に残っているという生徒に会うことができた。また、学校のポリシーとして隣接する大学と提携し、4年の高校での在籍で大学における単位を15単位とることができる制度や、大学の授業を受けたり、施設を使ったりすることで大学を生徒にとって身近にさせる体制が整っている。

プロジェクト Power Writing は、パウロ・フレイレ(Pauro Freire)の著書 *Pedagogy of the oppressed* の教育観に共鳴をうけ始まったものである。特に「読む、書く、話す」の3つの能力を強化することを軸とし、生徒は詩を書くことで情報を発信し、教師はここから生徒に学び関係も生まれることに注目する。このプロジェクトでは、生徒は教師が自分の詩からメッセージを受け取る(学ぶ)ことで、自尊心を高めることができると考えている。プロジェクトを始めるにあたって、担当するA教師は生徒に次のように話す。

私たちの国の刑務所には世界の他の国よりも高い比率で、字の読めない、書けない、うまく話せない人たちでいっぱいです。読み書き能力の欠如、これはアメリカの刑務所のはっきりした特徴の一つです。人種、経済的背景、虐待された子ども時代のいずれとも関係ありません。もしあなたがこの社会で力を持ちたいと思うなら、あなたは3つの読み書き話す能力を持たなくてはなりません。これはこれから行う活動の焦点でもあります。このクラスは力、あなたの力にあります。この授業で、わたしたちはあなたを取り巻く世界に影響力をもつために支援します。もし私たちが迷っていたり、あなたの期待する道から外れていたたりしたら、すぐに言ってください。

しかし、教師はプロジェクトを行うにあたってどれだけ教室に障害が多いかを次のように述べている。40分間の授業は短すぎることに、周囲からのノイズが多いこと、またスタッフが授業中にもものを借りに教室に入ってくることなどである。作業は、生徒が書いた詩を載せた Journal と呼ばれる日誌を生徒に渡し、これについて話し合い、朗読することからはじまり、そして各自詩を書く作業を行う。このプロジェクトを実行するうえで、担当する教師が共通して持っている指導方針は次のようになっている。A教師と共に活動を行うB教師からでたものである。

「生徒にとって安全な場所をつくること」

「作業にあたり、一生懸命におこない、誇りや責任の持てる尊敬に満ちた場を確保すること」

「継続することで生徒の取り組みを築いていくこと」

「正直さ」、「聞くこと」、「尊敬」、「暖かいサポート」、「共感」
「武器としての読み書き能力」
「社会的、政治的、歴史的な文脈の中でのみ教えることができること」
「公正さの感覚」、「成績でもなくテストの概要でもないこと」
「一生懸命にやること」、「生徒と共に大人が多くいること」
「ユーモアのセンスと遊びの感覚を持つこと」
「生徒はよく飲み込めると確信すること」
「ティームティーチング」、「柔軟性」
「外の世界に対抗するために生徒は何を学んだのかをテストすること」
「マッサの言葉²⁰に誇りを持つこと」
「すべての人の才能を祝福すること」
「言語を習得するためのナットやボルト（文法）を習得すること」

これらの方針に共通するのはベナード（Benard）の論文²¹にある育成すべき能力観「社会的な能力」「問題解決能力」「自律性」「目的や未来への志向性」と、学校や教師に期待する活動や意識「ケアとサポート」「積極的かつ高い期待」「意味のある学校参加の機会」である。都市部に住む多くの生徒は、自己の中にもまた周りの環境や人間にも社会的な問題を抱えて、U校においても生徒の作る詩に多くの社会問題はその周辺に内在していることをみることができる。家庭内暴力、人種差別、HIV、ドラッグ、殺人、窃盗などが記された詩である。一方で、日々の日常生活における不安や悲しみ、将来への予感を書いたものも少なくない。

ヒスパニック系の男子生徒はマイノリティとしての思いを綴っている。

この国の大多数の利害と自分の関心は一致しない。それがマイノリティであり続ける原因だろう。この国ではマイノリティがそんな経済のスタンダードに参加させてくれるし、そのコミュニティの中でビジネスをすることも許してくれる。例え第三世界の生活様式をしたものであっても・・・(略)・・・。マイノリティと呼ばれても文明化されたものと同じ能力を持っている。それはソウルダンスや歌を奏でている。原始的なものとして偏見の目で見られるような精神的なイデオロギーとは違う。・・・(略)自分のゴールは家で、コミュニティで何をしていくのかを自分で決める能力を人々に持たせることだ。自分たちの社会的精神的なセンスのスタンダードは、抑圧された人々を二度と圧力の元に置かない。

また、アフリカ系アメリカ人の女子生徒は自己の人種に起因する現実について次のように記している。

現実が私をとらえて放さない。家族や自分について考えると何が起こり、どうなっていくのか。愛した人は色あせ、美しい絵や虹はかつてあったものとなった。それらはすべて白黒になっていく。黒さは顔を横切り幸せはそこにはない。・・・(略)心は痛みの中で冷たいと感じている。強さは私の体をしのごうとするが悲しみにいつも取られてしまう。・・・

彼女はその他に収監された父のもとを訪れるまでを、自宅からその途中のタクシーの中、バスを待つ駅の中、バスの中、そして拘置所についてからの出来事や思い、そして父が無実であることを信じ、父と会う様子を綴っている。それは、聞くものにとっては一つの物語にすぎない

が、彼女にとっては心に負った深い傷をどう解決していけばいいのか葛藤の時間を綴り、そして最後に愛する父への思いを確認するものとなっている。こうした生徒によって書かれる詩には、始まり・経過・終わりまでの時間的な流れや、揺らぐ思いをつづりもの、出口の見つからない混沌とした感情の中で何かを模索しようとする姿が描かれている。

10代の生徒たちに見られる不安や葛藤は、現実的な悲劇という点では様々な差異はあっても、人種や国籍や貧富を越えて様々な形で見ることにはできる。しかし、将来という確証がもてず、自己の思いをアピールする場が学校にない生徒たちにとって、表現しそれをオーディエンスに訴えることはフリスが述べるように、発する側と受け手の側に相互作用の効果をもたらすものである。

ヒップホップの音楽に載せて歌われる彼らの詩を本・テレビ・ビデオといったメディアにのせることで、生徒は意志や感情を表現し、社会に対して発表する場を与えられている。こうした詩に見られる価値観や観念、そしてメディアという手段、そしてテーマとなる社会・家族・地域・学校といった環境、そしてそこに内在する問題と自己の関係の認識は、生徒に社会に参加するきっかけと手段を与え、社会・政治的な場面における意志決定の力も養うものになるだろう。

生徒の一人は、この Power Writing によって気づいた思いを次のように述べている。

・・・これまで考えたことのないことに気づかせてくれた。ライティングは、時には笑い、時には泣くといった複雑な感情をもたらし自分を混乱させ、また自分自身もよく知らなかった自分と出会うことでも混乱した。また人生の意味を考え、よい人間となること、ポジティブに自分を表現する手助けとなっている。

ヒップホップの起源とも言える西アフリカのグリオが果たした役割には、口承によって歴史や伝統を伝える以外にも、解釈者、助言者、仲介者、作者、教師といった役割も備えていたという。ヒップホップによって社会に問題や自分の意志を伝えていくことで、さまざまな社会的な役割を担っていくことにつながることを表している。U校の生徒たちはまさにこのグリオの役割を、プロジェクトを通じて追体験し、起源としての黒人マイノリティ文化、そこから昇華した現代のアメリカ社会におけるマイノリティ文化として、マジョリティ文化ではない自己のもつオリジナルな文化を社会における主体的な参加者として取得しようとしている。

3. ヒップホップに見られる物語性とオーディエンスとの価値の共有

これまでの生徒の作詞の内容をみると、それらは彼らの生活世界において発生する問題や置かれている状況の閉塞感からコントロールできない感情が強く出され、学校世界とは異なる日々の生活世界に強く関連したものになっている。揺れ動く感情や不安に満ちた感情を記述するという面では日本の生徒にみられる不安的な感情とあまりかわらないかもしれない。しかし、学校の教育それ自体や学習活動からの抑圧といったものではなく、社会的に抑圧された集団とそれに属している自分というコミュニティという集団的アイデンティティをもった視点から社

会批判を行っている点は明確である。

音楽には時間的空間の中で、テキストとしてよりもプロセスとしてその価値が分析されるとサイモン・フリスは述べていた。彼は「音楽はアイデンティティと同様に、パフォーマンスであると同時に物語であり、個人における社会的なもの、社会における個人的なもの、身体の中の精神、精神の中の身体を記述する²²」もの、つまりパフォーマーは創作活動を通じて、集団的なアイデンティティと個人的なアイデンティティの双方を獲得すると同時に、自己の経験をそこで意味あるものに変化させていると言明している。

浅野智彦は、自己というものが物語を通して生み出されていくこととし、その特徴を次のように整理している²³。

- 視点の二重性；「物語を語るということは、語り手の視点とは別に、語られた物語の登場人物（主人公がその代表）をもう一つの視点として創り出す作業」である。
- 出来事の時間的構造化；物語は「それが諸々の出来事を時間軸に沿って構造化する語りである。・・・基準は結末にあり・・・語られる出来事はみな、今の自分（結末）をどのようなものとするかにかたがた、またその結末を納得のいくものとするように配置されることになる」。
- 他者への志向；物語は「それが本質的に他者に向けられた語りである」、したがって「語り手とは異なった視点からの評価を受けるということを意味している・・・(略)・・・物語が聞き手に受け入れられるということは、その評価を共有するということであり、潜在的にせよ顕在的にせよ、ある価値観が正当化され、伝達され共有されていく過程」である。

浅野はこうした物語が語られ、共有される範囲「道德の共同体」が存在し、こうした語りの能力の衰退は自己のまとまりの解体をもたらすと述べている。自己を語る物語性の意義は、ヒップホップのもつ音楽性や創作活動にあてはまるものである。音楽をみるときに、ブルデューのようにテイスト（趣味）からその美的感覚や文化がどのようにクラス（階層）と結びついているのかを推察することもできるが、音楽はそれを作る側はその創作プロセスを通じて、自己の世界を作りだし、また受け手の側が主観的に作り手であるパフォーマーのストーリーを読み、これを自己の境遇に投影させ、価値観の共有化が図られている。それほどに流動的で相互作用性の強いものとして理解することができる。

ドラッグや犯罪のなかに置かれている自己を語るために出現する登場人物は、すでに自己の領域を出て、オーディエンスと一緒に今ある納得できる自己、つまり結末にむかって語り直しが始まっていく。時には、家族への愛となり、また父親への愛、そしてコミュニティへの貢献という形となってその結末を迎える。その価値が共有されることで、自己の所属する集団への確かなアイデンティティを構築していくのである。

テイラー（Taylor）は、人のアイデンティティ形成についてそれが一人で完結するものでなく、他者との対話つまり他者からの承認によるものであるとし、その論考のなかで次のように述べている²⁴。

もし（アイデンティティ）内面における形成が、独白的な意味に理解されるならば、事柄の性格上、そういったものは存在しない。……（略）……人間の生の、この決定的な特徴とは、それが根本的に対話的な性格を持つということである。我々は、表現のための豊かな人間言語を身につけることによって十全な人間主体となり、自らを理解し、自らのアイデンティティを定義づけることができるようになる。ここでの目的のために、私は言語を広義に解釈したい。すなわち我々の話す言葉のみでなく——芸術、身ぶり、愛などの「言語」を含めて——我々が自己を定義づける他の表現形態も含めたい。しかし我々はこれらの表現形態を他者との交渉を通じて学ぶのである。……（略）……この意味で、人間の心の起源は独白的ではない。すなわち、それぞれの人が一人で達成するものではない。それは対話的なのである。

ヒップホップだけでなく、多くのコミュニケーションがアイデンティティ形成に与していることは間違いない。しかし、学校文化の中で発する文化や言語を制限されるマイノリティにとって、ヒップホップの音楽にある語りトリズムにはこれまで周縁化されてきたアフリカ系アメリカ人の伝統やコミュニケーションとしての機能だけでなく、そこで言葉を発しようとそこに集まる人々のたましいが宿されてきた。それだからこそ、生徒はヒップホップに乗せて言葉を語り、社会的な抑圧からとどされた自己の回復の物語を聞き手の側とのコミュニケーションを経て作りだしていけるであろう。

おわりに

WASP 文化やこれまで学校文化にはないマイノリティの生活文化を表象するポップカルチャー、ヒップホップという独自の文化性をもった活動がマイノリティの子どもたちに受け入れられやすく、社会階層の低い家庭出身の子どもたちや反社会的行動をとる子どもたちは、学校文化を嫌う傾向があることはブルデューやウィリスの研究のなかでも言及されてきた。マヒラらの論考の中でも、学校文化と本稿で扱ったマイノリティの生徒の生活文化との間には隔たりがあり、必ずしも学校における教育がマイノリティの能力を評価するものにはなっていないことが示されていた。マイノリティが社会に対する自己の持つ可能性を見出し社会に向け発信する手段として、ヒップホップといったポップカルチャーをリテラシー教育の中で利用する意義は、そのセルフアサーションを高めるという役割だけにとどまらず、集団的アイデンティティの育成そして拡散する自己のアイデンティティの確認にまでいたっている。また若者文化におけるヒップホップのムーブメントはその集団やコミュニティの枠を越え、世界的な潮流となっている。こうしたムーブメントに乗るマジョリティ側の若者も少なくない。すべての文化がその意志を表明する機会を付与されることを保証するのが民主主義社会であるのならば、本研究で述べた実践はその社会実現のために有効なものであり、また社会への自己の働きかけが有効であることを実感することは、社会への関心を喪失した子どもたちにとって自発的社会参加を促す上で一つの機会となるだろう。

Power Writing における詩の創作を通じて、自己を「語る」ことの自己への効果は、聞き手よりも語り手に大きな効果をおよぼすと考えられる。日常的な現実の体験を現在の自己の視点から語り、それが受け入れられことで、語り手である子どもたちは自己表現を通じて自尊感情や

自己の有効性を取り戻すことができる。自己を語ること、その思いを表現する作業を十分に与えられることで、生徒は自己の思いがどこからくるのか、「問題」と自己とがどうかかわっているのか明確にし、社会への積極的な参加の必要性や使命感を認識することにつながるだろう。

¹ 村上通哉編『筑豊・池尻の子どもたち』、たいまつ社、1972

² ブルデュー&パスロン著、宮島喬訳『再生産』藤原書店 1991、ピエール・ブルデュー著石井洋二郎訳『ディスタンクシオン I・II』藤原書店 1990

³ NAEP の結果については、ホームページ http://nationsreportcard.gov/science_2005/ 参照。

⁴ 特に、ニューヨーク州では州によって一斉に行われる標準テストの強化からドロップアウト率が上昇しているといわれている。TIME 誌 (2007.5.29 版 20120 号)

⁵ Heath S. B. *Ways with words: Language, life, and work in communities and classrooms*, Cambridge: Cambridge University Press. 1983; Shuman, A., *Storytelling rights: The uses of oral and written texts by urban adolescents*. Cambridge: Cambridge University Press. 1986

⁶ Paul Willis, 1977 *Leading to Labor: how working class kids get working class jobs*, Ashgate Publishing Limited, 日本語訳熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎どもー学校への反抗・労働への順応』ちくま学芸文庫 1996, pp.181-183, pp.214-215

⁷ Nadine Dolby, 2003 'Pop Culture and Democratic Practice', *Harvard Educational Review*, Volume 73 Number 3 2003, pp.258-285, Anne Haas Dyson, 2003 'Welcome to the Jam: Pop Culture, School Literacy, and the Making of Childhoods', *Harvard Educational Review*, Volume 73 Number 3 2003, pp.328-361

⁸ Maisha T. Fisher 'Open Mics and Open Minds: Spoken Word Poetry in African Diaspora Participatory Literacy Communities', *Harvard Educational Review*, Vol.73 No.3 Fall 2003, pp.362-389

⁹ Paul Gilroy, *The Black Atlantic Modernity and Double Consciousness*, Verso 1993 日本語訳上野俊哉・毛利嘉孝・鈴木慎一郎訳『ブラック・アトランティックー近代性と二重意識』月曜社 2006, p.148

¹⁰ Simon Frith, 'Music and Identity', Stuart Hall edited *Questions of Cultural Identity Who needs Identity?*, Sage Publications of London, 1996, 日本語訳柿沼敏江訳「音楽とアイデンティティ」『カルチュラルアイデンティティの諸問題』所収、7章 p.192

¹¹ Ibid., Simon Frith, p.202

¹² ヒップホップは音楽のジャンルであるが、ラップは歌詞の中で韻を踏むといったヒップホップの音楽の一技法として考えられる。

¹³ Ibid., Paul Gilroy, p.71

¹⁴ 陣野俊史の「ラップと暴動」(『現代思想』2006年2月臨時増刊号)のなかでは、日本では朝日新聞、フランスでは「ル・モンド」紙、「リベラシオン」紙、週刊誌「ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール」誌、「レクスプレス」誌を紹介している。

¹⁵ Ibid., Gilroy, p.167

¹⁶ Ibid., Maisha T. Fisher p.382

¹⁷ Jabari Mahiri & Soraya Sablo, 'Writing for their lives: The Non-School Literacy of California's Urban African American Youth', *Journal of Negro Education*, 1996, 65, p.168

¹⁸ Ibid., Mahiri & Sablo, pp.164-180

¹⁹ 他にもライティングや近郊の裕福な生徒の通う学校との交流を図る教育活動も同時に行っているが、それぞれの教育活動は、まったく異なる教科で異なる教師によって行われている。

²⁰ ニューヨーク市ブロンクス区周辺で使われる言葉

²¹ Benard, B "Fostering Resiliency in Urban Schools", Closing The Achievement Gap, A Vision for Changing Beliefs and Practices Association for Supervision and Curriculum Development, 1996, p.p.96-119

²² Ibid., Simon Frith, p.190

²³ 浅野智彦著『自己への物語論的接近—家族療法から社会学へ』勁草書房, 2001, pp.7-13

²⁴ チャールズ・テイラー「承認めぐる政治」, 佐々木毅訳『マルチカルチュラリズム』所収, 岩波書店, 1996, pp.46-47

Empowerment Education for Minority Students in the U.S. Secondary school

Pouring out Student's Soul in writing lyrics of Hip Hop

Tomomi KAWAKAMI

This paper reports a pedagogical strategy using Hip Hop for minority students and inquires how that strategy would empower them and what kind of meaning have for them. In which they present their making lyrics in the rhythm of Hip Hop, the practice is expected to encourage their literal ability and have a motivation for voluntary social participation. After U.S. education reform, government took a procedure for accountability and students' higher standards; however, as the same time the problems of high rate dropped out and low achievement are occurred, especially we can see those achievement gaps between white students and African American students or Hispanic students.

Many types of educational strategies for Minority are introduced in schools in those days, but fundamental gap of cultural meanings between home and school are still existent. Therefore, Mahiri and Sablo argue how we can link the gap; what kind of activity can rescue them from hopeless world. Thus, they introduce some students' voluntary writings and claim the meanings and effect for what they express. In this paper, first of all I argue the meanings of Identity of African American Music especially Hip Hop, after I analyze about students' works from two resources; which is from the works from Mahiri and Sablo; another from a classroom practice in a New York City Public High school.

To clarify the Identity of African American Music, I examine the phenomena of Hip Hop from the perspective of which Simon Frith have. He is one of the people who identify the function of music identity in post modern era. He traces the trajectory of African American music then suggests how they were suffered during slavery time and spent the hard situation forbidden to gain the literacy. Thus, African American has created an original communication style, which has rhythm and rhymes with passionate beating. It reflects a performer's hard situation. In the stage of Hip Hop, audiences also present their passion; in other words, their response and dialogue in the process of performance is important function for story telling in Hip Hop. Consequently, African American music has a form of interdependent communication. From the student's works, I search the matter of what they want to describe. Mostly they express their struggling in gang society, oppressed situation, poverty and love and the formulation of their lyrics shapes a narrative style.

Subsequently, as I consider the possibility of Hip Hop from such as interdependent and narrative style, I conclude the effect of this activity which connects to ensure themselves with self-assertion and self-effectiveness and encourage participating society.